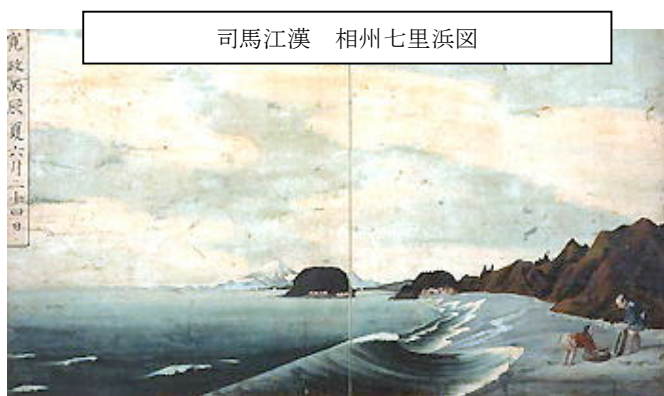


奇跡（軌跡）の連鎖 第二回
波の伊八から始まったジャポニズム

前回は波の伊八について記させて頂きましたが、今回は先ず
＝北斎の人生・制作について＝

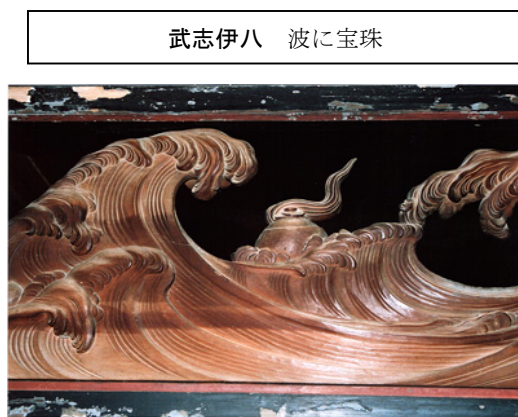
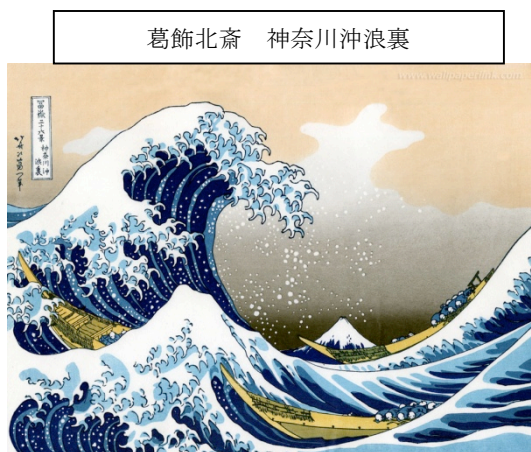
葛飾北斎が生まれたのは、＝波の伊八＝と呼ばれた名工武志伊八良信由におくれること6年→1760年とされています。貧しい家に生まれ、幼い頃より老苦を重ねた北斎が絵の道に進むのは、18歳で浮世絵師・勝川春章の弟子になってからでした。しかし、向学心旺盛な北斎は、伝統と伝承を重んじる世界にはおさまりきれず。他派の作品や蘭画、西洋画を積極的に学んだ事が師匠の逆鱗に触れ、破門されたとも言われています。その後、貧しい生活の中でも、絵で生きると思い決めた北斎は、版画だけではなく・肉筆画、挿絵、役者絵、美人画、武者絵、等々を生活の為に描きながら、生涯に3万点もの作品を発表します。主要作品には「北斎漫画」「百物語」「富嶽三十六景」「千絵の海」「諸国滝廻り」「富嶽百景」「肉筆画帖」などがあります。

＝北斎が西洋にも名を轟かせた作品「神奈川沖浪裏」と伊八作品の繋がり＝



北斎が波の描写に興味を持ったきっかけは、司馬江漢の作品（江ノ島 児が渚）や（相州 七里浜図）とも言われています。江戸時代・江漢が蘭画の様式で実物を見ながら何枚も同じものを制作したという波を目立たせた海の風景画は流行し、日本中の寺院や神社にも額に入れられ寄付されました。この傑作を見ようと、寺社には群衆が押し掛けたそうです。

しかし、北斎の「神奈川沖浪裏」の様に大胆な波の描写は、江漢の作品からは感じられません。波を遠方から見つめて描く作品ばかりで・北斎の波の中に入り込んだ様な、波を横から捉えた作品は北斎独自の（それまで他の作家には見られなかった）表現方法です。



しかし、平面の絵画と立体の彫刻という表現の違いはあっても、波の中に入り込んで波の動きを観察し、瞬間を切り取った様な独特の構図・表現に関して、北斎の「神奈川沖浪裏」と非常に似た作品が存在したのです。それが“伊八”の「波に宝珠」（千葉県いすみ市 行元寺欄間）です。

伊八がこの作品を制作したのが1806年頃。北斎が「神奈川沖浪裏」を発表したのが1833年頃。北斎が伊八作品に学ぶには充分の時間があつたと想像されます。

＝伊八と北斎の接点は本当にあったのか？＝

調べて目にとまった事柄を幾つか、記してみます。

①伊八が1806年頃に行元寺「波に宝珠」を制作すると、上方の同業者に『江戸に行ったら波を彫るな』と言わしめるほど、伊八の名も作品も広く世間に認められていたので、これを同じ波の描写に執着し、寺社の仕事も手掛けていた北斎が聞き逃す事は無かったであろう。ということ。

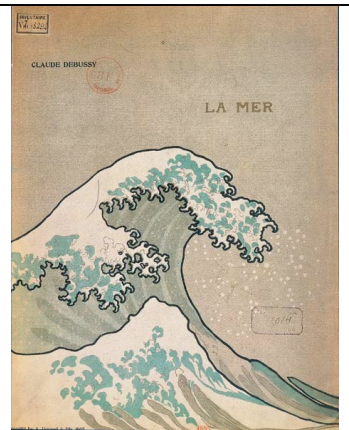
②神奈川県・浦賀にある浄土宗眞福寺の欄間透かし彫りの裏には伊八の名が記されており、この浦賀には北斎も長期間潜居していた。と云う史実。

③伊八の名作「波に宝珠」のある行元寺には、五楽院等随の“土岐の鷹”という杉戸絵があり、この等随と北斎は同じ師（三代堤等琳）に絵を学んだ仲。

当時神奈川県の三浦半島から房総半島への船便は多かつたらしく、北斎も頻繁に房総を訪れていた事は彼の遺した作品からもわかります。又、江戸の終わりの浦賀港から「これから安房の打墨に行く。」と話して老絵師が渡海したという説があり。これは、北斎が打墨の伊八の所に赴いたのであろう。と伝えられているお話。

と云う訳で現在ではさまざまな研究から、北斎と伊八はお互いの作品や存在を知っていたと考えられています。

ドビュッシー“海”スコア表紙



＝「神奈川沖浪裏」の制作と日本人独特の美術作品制作について＝

日本の美術作品制作に関しては、先人の優れた技術を模倣し学びながら、そこに独自の手を加えて又新しい作品を生み出す。という模倣をよしとしたカタチがあります（伝統工芸・絵画等々）。おそらくは伊八の作品に学び、「神奈川沖浪裏」を制作した北斎ですが。

「神奈川沖浪裏」は丁度ヨーロッパでジャポニズム（日本趣味・日本心酔）の勢いさかんな時代に日本から渡欧しました。（開国や貿易による日本からの美術品の流出。陶器の包装に版画や北斎漫画が使われたり、1867年に日本が初参加したパリ万博では、日本の美術工芸品が高く評価され、前述のジャポニズムは19世紀中ごろから勢いを増してヨーロッパに広まりました。）

この作品「神奈川沖浪裏」は、ジャポニズムの時代の中でも、特にヨーロッパのさまざまな分野の芸術家に影響を与える作品となりました。例えば作曲家のドビュッシーは、この作品からイメージして「ラ・メール（海）」という曲を作り、出版されたスコアの表紙にはこの「神奈川沖浪裏」が使われました。彫刻家のカミーユ・クロードルは、北斎作品では波にあおられる船をニンフに変えて配し、彫刻「波」を制作しました。

北斎の作品「神奈川沖浪裏」の与えた影響は絶大でした。

カミーユ・クロードル“波”



ところで、北斎の作品では日本からの積み荷に包装紙として使われ、海を渡った「北斎漫画」もヨーロッパの多くの芸術家に影響を与えましたが、その中にはゴッホやドガ・ロートレックやスーラがいます。

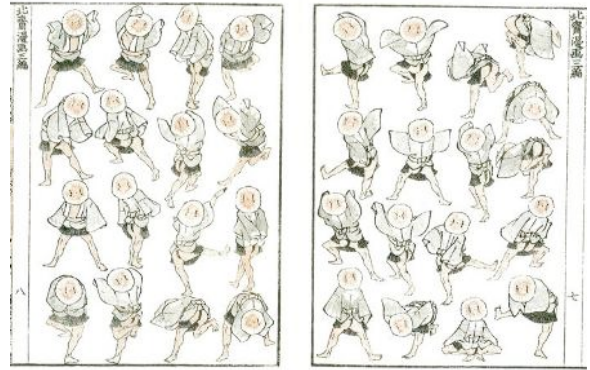
北斎漫画には、人の動きがさまざまな場面・ポーズで描かれ＝人物描写の手本書の様な感さえあります。

北斎漫画「やっこ踊り」と、ドガの「踊り子たちの準備運動」を見比べてみるのも楽しいものです。

ドガ「踊り子たちの準備運動」



葛飾北斎「奴おどり」



今回さまざまな文書を調べながら一番心を打たれたのが、ゴッホがジャポニズムの時代に弟テオに送った手紙でした。（おそらく北斎の事を頭に置いて記している文章ではないかと思うのですが。）

「日本美術を研究すると、間違いなく聡明で博学な哲学者を発見する事になる。その男は何をして時間を過ごしていると思う？地球と月の距離を測っている？ビスマルクを勉強している？違う。1枚の葉を研究しているのだ。しかしこの葉の研究のおかげですべての植物が描ける様になり、次に季節が、広大な風景画が、動物が、そしてついには人間が描ける様になるのだ。こうやってこの男は人生を送っているが、全てを完成させるにはこの人生は短かすぎるのだ。彼は＝日本人はとても純粋で、まるで自分自身が花の如く生きている」（ゴッホの手紙より）

＝こうして辿り着いた伊八からのジャポニズム＝

この文書を記しつつ・・・ヨーロッパに広がったジャポニズムの根源には北斎の「神奈川沖浪裏」があり、その根源には伊八の作品があったとすれば。もしかしたら伊八の存在こそジャポニズムのはじまり・・・と、考えてみると、今房総で暮らす美術芸術作品を愛するひとりの人間として・・・彼の作品の軌跡と伊八・北斎の出会いの奇跡に感動致します。

前述の北斎について記されたであろうゴッホの手紙下線付き部分からは、更に連想されるひとつの文章があります。それが北斎の遺言（富嶽百景 跋文）です。

「私は、6歳から物の形状を写す癖があり、50歳ごろから数々の作品を発表してきたとはいうものの、70歳以前に描いたものは、実に取りに足らぬものばかりである。73歳にして、ようやく禽獣虫魚の骨格や、草木の生え具合をいささか悟ることができたのだ。だから、80歳でますます腕に磨きをかけ、90歳では奥義を究め、100歳になれば、まさに神妙の域に達するものと考えている。百数十歳ともなれば、一点一画が生き物のごとくなるであろう。願わくば、長寿をつかさどる君子よ、わが言葉が偽りならざることを見届けたまえ」

この跋文をゴッホの手紙と照らし合わせてわかる様に、例えば1枚の葉・ひとつの波・の形状をしつかりと把握して描写する事から、この世の万物全てを捉えようとした北斎の長い作画への旅は始まりました。

伊八も北斎も、視界に入るさまざまなものをいっぺんに捉えるのではなく、例えば波ひとつをいかに追及して捉えるか？そしてその捉え方は対象と距離を持って見つめるのではなく、時には自分がその対象（海）に入り込み、

対象の一部であるかの如くの想いや状況にて瞬間をつかみ取る。

その様な（魂）や捉え方で結果生まれた作品は、ヨーロッパの人々にとって実に新鮮な驚きであり、民族の隔たりなく人々の心や当時の西洋芸術世界さえも大きく動かしました。

今後、皆様が房総の伊八作品を眺められる時、その作品を根源に・遥か遠くヨーロッパに広がっていったジャポニズムや、生み出された素晴らしい芸術作品の数々がある事を想いながらご覧になって頂けましたら、更に楽しんで頂けるのでは・・。などなどと、ささやかに願っております。